

開催地名：和歌山県広川町	
開催日時	令和元年 10 月 19 日（土） 13：30 ～ 15：00
開催場所	広川町役場
語り部	山崎 義勝 （岩手県釜石市）
参加者	広川町消防団他 約 70 名
開催経緯	<p>当地域は南海トラフ巨大地震の発生があれば 40 分で津波が来襲する位置にあるため、「稲むらの火」の地元として知られるように、地震・津波発生時の心構えは出来ていても、実際に大災害を経験したことはなく、予想を超えた混乱が発生するものと考えられる。そんな中、避難誘導、消火・救助活動、さらにその後の避難所での活動等について、消防団員全員が様々な対応力を身に付ける必要がある。</p>
内容	<p>（1）釜石の被災状況</p> <p>岩手県釜石市は製鉄業で発展し、ラグビーの強豪、新日鐵住金釜石を擁する「鉄と魚とラグビー」の町である。私は震災当時、釜石大槌地区消防本部消防長だった。釜石市の震度は 6 弱、マグニチュードは 9.0 であった。三陸沖で大きな地震が起きると 30 分後に津波がくると言われていたが、その通りの時間に高さ 10 メートル弱の津波がやって来た。釜石湾には深さ 63 メートルの世界一深い湾口防波堤があり、それで市街地を守ろうという計画だったが、津波はそれを一気に乗り越えた。人口 39,996 名の釜石市の犠牲者は 1,040 名（2.6%）、避難者は 10,516 名（26.3%）、被災家屋は 4,704 戸（29.1%）に及んだ。押し寄せる津波で木造建築の建物は全壊し、市街地は積み重なる瓦礫で通行不能に陥った。</p> <p>（2）消防関連の被災状況</p> <p>釜石市の消防職員数 108 名のうち、殉職者 2 名（1 階の通信指令室で電話対応中）、家族が犠牲となった職員が 19 名（家族の犠牲者 31 名）、被災家屋数 41 棟に及んだ。4 棟の庁舎のうち 3 つが全壊、車両関係も保有していた 26 台のうち 18 台が被災・流失し、消防機能も麻痺状態に陥った。また、釜石市消防団については、死亡者が 14 名（殉職者 8 名）、消防屯所 43 棟のうち 18 棟が被災、消防車両も 41 台中 9 台が流出した。</p> <p>（3）避難についての反省点</p> <p>津波警報を鳴らしても、避難しないで自宅で被災する事例が多かった。また会社や子どもを心配して、津波が来る海岸方向に向かい被災した方も多し。さらに車による避難も課題を残した。車は避難時に道路を渋滞させるし、津波がいきなり襲ってくると逃げようがない。勇気はあるが、車を路肩にとめて徒歩で避難すべきである。</p>

会社や商業施設など、それぞれの事業所では運営者の判断が明暗を分けた。津波警報が出て従業員全員を避難させ、そのまま拘束したところは無事であった。しかし避難後自由行動にしたり、残務整理をしてから避難しようとしたところは逃げ遅れた。ぜひ事業所や組織ごとの避難計画を設定してほしい。これは行政の立ち入りにくい部分であるので、従業員を守るという観点から避難計画を立て、日頃から訓練してほしい。

### (3) 釜石の奇跡と悲劇

東日本大震災後、私たちはすぐ災害対策本部を立ち上げた。さらに県主導で、行政・自衛隊・警察・消防・電気などのインフラ担当者が集まり災害対策調整会議が組織され、日々報告と翌日の課題を話し合った。それを私たちは災害対策本部に持ち帰り、避難所などへも情報提供した。

また、マスコミでは釜石の奇跡と悲劇が報道された。奇跡は、釜石市の小・中学生が迅速に津波から避難し、約 3,000 名、99.8 パーセントが命を守ったことである。すでに下校していた生徒もいたが、それぞれ素早く避難した。釜石の小中学校では、日頃から防災学習カリキュラムや避難訓練を徹底している。これはその成果であった。一方悲劇の方は、鶴住居地区防災センターに避難した 166 名が亡くなったことである。この施設は実は避難所ではなかったが、名称から住民が誤解した。震災の 1 週間前に同施設で避難訓練が行われたことも誤解に拍車をかけ、東北の行政施設で最も多くの犠牲者を出した。やはり行政の住民周知は曖昧ではいけない。正確な情報を日頃から発信しておくべきである。



開催地より

震災直後、実際に大規模な災害に直面した消防関係者からの具体的なお話は、本当に自分たちにとって得難い情報となった。平時から災害対策要員であることを自覚し、災害発生時に課せられる役割を果たすための意識・体制づくりを進めていくことを期待したい。